

第2問

出典

【文章Ⅰ】『伊勢物語』第六段

【文章Ⅱ】賀茂真淵『伊勢物語古意』第一

【文章Ⅲ】荷田春満『伊勢物語童子問』第二卷

『伊勢物語』は、平安時代初期に成立した作者未詳の歌物語で、在原業平（八二五～八八〇）を主人公のモデルとしている。

『伊勢物語古意』は、江戸時代中期の国学者・賀茂真淵（一六九七～一七六九）の著作で、宝暦三（一七五三）年頃、八代將軍吉宗の子・田安宗武に献上された。

『伊勢物語童子問』は、江戸時代中期の国学者・荷田春満（一六六九～一七三六）の著作で、享保年間（一七一一～一七三六）に成立した。書名にある「童子問」は、もともと伊藤仁斎の儒学書の書名で、その影響を受けた春満が、同書の問答形式を踏襲し、書名も同書にちなんで付けた。なお、真淵は春満の弟子で、『古意』は『童子問』よりも後の成立であるが、今回は話題のつながりを考慮して、『古意』を先に配した。

解説

■ 出題のねらい

複数の文章を読み取り、論じられている内容を整理する力が求められる共通テストでは、古文でも複数の出典を対比させる出題が予想される。特に、ある出典に対し、異なる視点で考察を加える注釈書を複数並べて、情報を整理し考察させるような出題は試行調査でも出題されており、今後も出題される可能性がある。このような出題傾向を踏まえ、『伊勢物語』の本文と、二種の注釈書を読み比べながら考える必要のある出題とした。

【概要】 それぞれの文章ごとにまとめると、次のようになる。

【文章Ⅰ】 昔、男がいた。男は、結婚のかなわなかった女をこっせりと連れ出したが、途中の倉で、女は鬼に食われてしまい、後悔の念を歌に詠んだ。これは、二条の后がまだ后になる前のことで、男が連れ出そうとしたのを、後の兄弟たちが引き留めて取り返した。それを鬼といっているのだ。

【文章Ⅱ】 「二条の后」以下は後人の注記である。物語は、業平の時代や官位を変えている。古人の名を出した箇所もあるが、密通の場面では出していない。密通が事実ではないので出せなかったのだ。注意深い作者が、後の不義を描き、さらに兄弟の名を出して恥をかかせるはずがない。物語の成立時期からも、二条の後の不義を書くとは考えられない。『新古今集』『哀傷』に、この歌が業平の歌として入っているのは、物語の後半部のない本文に拠ったか、後半部の記述を注記と考えて採用しなかったからだろう。

【文章Ⅲ】 白玉の歌が、『新古今集』に「題しらず」として入っているのは、その典拠が不明であるが、おそらくは物語に拠ったのだろう。この歌は業平の歌らしくないが、後人は「むかし男」を業平と考えていたため、歌風の違いを意識せず、誤解したのでだろう。「哀傷」に入っているのは、鬼に食われた話を実話と考えたのだろう。

問1 ① ⑤ ② ③ ④ 《語句の解釈問題》

(ア) 傍線部を単語ごとに区切ると「よばひ／わたり／ける／を」となる。「よばひ」は、八行四段活用の動詞「よばふ」の連用形で、そこに「〜し続ける」の意を添える補助動詞「わたる」の連用形、過去の助動詞

「けり」の連体形、接続助詞「を」が続いている。

「よばふ」は、動詞「呼ぶ」に、反復・継続の意を添える「ふ」が付いてきた動詞で、本来の意味は〈呼び続ける〉であるが、そこから派生して、〈求婚する・言い寄る〉の意でも用いられた。ここは「女のえ得まじかりける（＝女で、妻とすることができそうになかった者）」について使われており、〈求婚する〉の意と見てよい。

最後の「を」は、順接（～ので）でも逆接（～けれど）でも用いられる接続助詞で、前後の文脈によって用法が変わる。そこで「を」の前後に注目すると、「を」の前には、先の「よばひわたりける」があり、後には「からうじて盗みいでて（＝やつのことで密かに連れ出して）」がある。このままでは前後のつながりが不自然であるが、ここに〈結婚がかなわず〉といった内容を補ってやると、〈求婚し続けたが、結婚がかなわず、女を密かに連れ出した〉という流れで理解でき、「を」は逆接と判断できる。

以上より、㊸「求婚し続けてきたが」が正解である。

残りの選択肢のうち、㊶㊷は「よばふ」の基本的な意味に即しておらず、誤りである。㊹は、現代語の「夜這い」を連想させる選択肢であるが、古語の「夜這ひ」は名詞でのみ用いられ、「夜這ふ」という動詞は使われなかった。また、㊸は接続助詞「を」の訳出もない。よって誤りである。

(イ) 傍線部を単語ごとに区切ると「はや／夜／も／明け／なむ」となる。この中で重要なのは最後の「なむ」である。

「なむ」は、未然形に接続する場合は、他に對する願望の終助詞で、〈～てほしい〉の意を表し、連用形に接続する場合は、完了・強意の助動詞「ぬ」の未然形と、推量ほかの助動詞「む」の連語で、〈きつと～だろう・～してしまうだろう〉といった意味を表す。通常、両者は接続で見分けられるが、ここは、直前にあるのが力行下二段活用の「明く」で

あるため、「明け」は未然形とも連用形とも考えられる。よって、接続では「なむ」の意味を決められない。そこで、文脈に注目しよう。

まず、「なむ」を他に對する願望の終助詞と考えると、傍線部は〈はやく夜も明けてほしい〉となる。一方、「なむ」を「ぬ」と「む」の連語と考えると、傍線部は〈すぐに夜も明けてしまうだろう〉となる。これらをもとに選択肢を見ると、前者は選択肢㊸「はやく夜も明けてほしい」と合致する。一方、後者に合致する選択肢はない。よって、㊸が正解である。内容的に見ても、㊸は、倉の外で見張りをしている「男」の心情として適切であり、さらに、本文にある「夜もふけにければ（＝夜も更けてしまったので）」からのつながりも自然である。

(ウ) 傍線部を単語ごとに区切ると「后／の／ただに／おはし／ける／時／と／や」となる。このうち、「の」は主格（～が）の格助詞、「と」は引用の格助詞、「や」は疑問の係助詞である。

この「とや」は「とや言ふ」の「言ふ」が省略されたもので、説話の末尾などで、〈～とかいうことだ〉という意で用いられる慣用表現である。

一方、解釈上重要なのは、「ただに」と「おはし」である。「ただに」は形容動詞「ただなり」の連用形で、「おはし」は尊敬の補助動詞「おはす」の連用形である。

「ただなり」は〈直接だ・普通だ・ありのままだ〉といった意を表すが、ここは〈普通だ〉の意である。同源の言葉である「ただびと」は、〈神に對して〉一般の人（天皇に對して）「臣下」の意で用いられるが、「ただに」も、〈天皇に對して〉「臣下であること」をいう。

よって、傍線部をそのまま訳すと〈后が臣下でいらっしやった時のことだとか〉となり、これと内容的に近い㊸が正解である。

残りの選択肢のうち、㊶は「おはしける」を「お仕えしていた」と謙讓語で訳している点が明らかに誤りである。また、㊸㊹は、どちらも

「おはす」の訳出がなく、誤りである。一方㊸は、「ご懐妊なさる」と、尊敬語で訳されているが、続く「過去」の助動詞「けり」の訳出がない。また、女性の懐妊を「ただならず」と表現することはあるが、逆に、懐妊していないことを、「ただなり」と表現することは普通しない。よって、㊸は誤りである。

問2 4 ① 《文法問題》「に」「なる」「て」「し」の識別

まず、a「に」 b「なる」 c「て」 d「し」の識別で重要な点を整理しておこう。選択肢に関わるものを中心にしてまとめると、次のようになる。

○「に」の識別 (a)

I 格助詞

↓体言、及び活用語の連体形に接続。

II 完了の助動詞「ぬ」の連用形

↓活用語の連用形に接続。

○「なる」の識別 (b)

III 断定の助動詞「なり」の連体形

↓体言、及び活用語の連体形に接続。

IV ナリ活用の形容動詞の連体形活用語尾

↓形容動詞の一部であるため、直前の言葉と切り離せない。

○「て」の識別 (c)

V 完了の助動詞「つ」の未然形・連用形

↓活用語の連用形に接続。

VI 接続助詞「て」

↓活用語の連用形に接続。

○「し」の識別 (d)

VII 過去の助動詞「き」の連体形

↓活用語の連用形に接続。ただし、カ変・サ変の未然形にも付く。

VIII 副助詞

↓体言など種々の言葉に接続するが、「し」を省いても意味が通る。

これらをもとに、各波線部を見よう。

aは「いと暗きに^来けり」という箇所にある。「に」の前の「暗き」は、ク活用の形容詞「暗し」の連体形で、ここは体言の「時」を補って「いと暗き時に^来けり」と言える。よって、この「に」はIの「格助詞」である。

bは「あばらなる^倉に」という箇所にある。「あばらなる」は、〈荒れている・すさまがある〉の意の形容動詞「あばらなり」の連体形である。したがって、「なる」はIVの「形容動詞の連体形活用語尾」となる。

cは「食ひて^{けり}」という箇所にある。「て」の前には、八行四段活用の動詞「食ふ」の連用形があるが、完了の助動詞「つ」も、接続助詞「て」も連用形接続のため、前の言葉からはどちらであるか決まらない。そこで、「て」の後を見ると、過去の助動詞「けり」しかなく、ここで文節が切れないので接続助詞ではない。「けり」は連用形接続であるため、「けり」の前の「て」は、Vの「完了の助動詞「つ」の連用形」と決まる。

dは「率て来し^女もなし」という箇所にある。「し」の前には、カ行変格活用の動詞「来^く」がある。一方、「し」の後には名詞「女」があり、この「し」を省くと「来女もなし」となり、意味が通らない。よって、

「し」はⅦの「過去の助動詞『き』の連体形」である。なお、「き」は連用形接続であるが、カ変・サ変の動詞には未然形にも接続し、この「来」も未然形で、「来し」と読む。

以上をもとにすると、①が正解である。

問3 ⑤ 《和歌の表現と内容に関する問題》

和歌Xは、上の句と下の句で、それぞれ内容上まとまりがある。

まず、上の句を見ると、初句から第二句にかけての「白玉か何ぞ」は、直後に「引用」の格助詞「と」があり、さらに第三句には「問ひし時」とあって、この「白玉か何ぞ」が〈問い〉の前身であると思われる。「白玉」は〈真珠などの白い玉〉のことで、形状の類似から〈露・涙〉のたとえとされるほか、〈大切な人・愛児〉のたとえとしても用いられる。

ここは前者で、草の上の「露」を、「(あれは)白玉か」と尋ねているのである。「何ぞ」の「ぞ」(係助詞)は、文末にある場合、断定・疑問(問ひただし)の用法で、ここは、疑問を表す「何」があるので、疑問(問ひただし)の用法である。また、「問ひし時」の「し」は、過去の助動詞「き」の連体形である。

以上をもとに上三句を訳すと、〈白玉か(それとも)何かと尋ねたとき〉となる。物語本文には、「草の上に置きたりける露を、『かれは何ぞ』となむ男に問ひける」とあり、この「かれは何ぞ」(「あれは何か」という「女」の〈問い〉)を言い換えたものである。

次に下の句を見よう。第四句の「つゆとこたへて」にも、引用の格助詞「と」があり、「つゆ」の部分が〈答え〉である。「白玉か(それとも)何か」という〈問い〉に対して、〈露だ〉と答える、ということである。結句の「消えなましものを」は、ヤ行下二段活用動詞の「消ゆ」の連用形に、強意の助動詞「ぬ」の未然形、反実仮定の助動詞「まし」の連体形、詠嘆の終助詞「ものを」が付いたものである。「まし」は、

事実に反することを想像したり、望んだりする言葉で、ここでは、〈消えたかった〉という「男」の希望を表し、さらにそれを「な(「ぬ」)で強調している。

以上をもとに下二句を訳すと、〈露だ〉と答えて消えてしまえばよかったのになあ」となる。〈女〉が「白玉か……」と尋ねたときに、「露だ」と答えて、その「露」のように消えてしまえばよかった」と悔やむ内容である。

なお、「男」がここで「消ゆ」という動詞を用いているのは、〈はかなく消えやすいもの〉である「露」が、「消ゆ」と「縁語」になるためである。「縁語」とは、〈意味の上で関連のある言葉を一首の中に詠み込む修辭法〉で、その「縁語」を意識して、「死ぬ」ではなく「消ゆ」を用いたのである。

以上を踏まえて、各選択肢を見よう。

①は、「上の句と下の句にそれぞれ会話文があり、歌全体が散文的な形になっている」とある。上の句の「白玉か何ぞ」、下の句の「つゆ」は、いずれも「引用」の「と」で受けており、形式上「会話文」と言ってもよい。「会話文」は物語などの散文作品で用いられるものであり、その点で「歌全体が散文的な形」であるとするのも、誤りではない。よって、①は適当な内容である。

②は、「つゆ」は実際の景物であるが、同時に、はかないものたたとえとして『消え』と縁語にもなっている」とある。物語の本文を見ると、「草の上に置きたりける露を」とあって、「露」は実際にあったものである。また、先に見たように「露」と「消え」は「縁語」であった。よって、②は適当な内容である。

③は、「希望を強調する『なまし』と詠嘆の『ものを』を組み合わせることで、強い後悔の念が表現されている」とある。先述のように、「なまし」と「ものを」は、「男」の希望を強調した表現であり、〈消え

てしまえばよかったのになあ」という後悔の念を表している。よって、③は適当な内容である。

④は、『かれは何ぞ』という女の生前の問いを踏まえつつ、ひとり生き残った男の心情が詠まれている」とある。上の句には「問ひし時」と、「過去」の助動詞があり、「女の生前」の話題である。一方、下の句は、「女」の不在に気づいた「男」の心情が詠まれている。よって、④は適当な内容である。

⑤は、『白玉』は女を暗示しており、『白玉』のように大切な人なげ死なせたのかと男が自らを責める歌である」とある。これによると、「男」は〈女を〉なぜ死なせたのかと自らを責めたことになる。一方、歌の下の句は「消えなましものをへ消えてしまえばよかったのになあ」とあり、これは、〈自分が生き残ったことを悔やむ〉内容ではあるが、〈女〉を死なせた自分を責める表現ではない。よって、⑤は不適当な内容で、これが正解である。

問4

6

③ 《理由説明問題》

①は、本文の「凡そ、この文には……業平ならぬさまに書きたがへ」の箇所と関わる。該当箇所の前半部では、「この文（『伊勢物語』）」に、業平の歌が多いことを指摘し、「その人のことを作れりとは聞ゆれどへ業平の歌を作っているとは理解されるが」とする。また後半部では、「時世（時代）・官位」を「その人（業平）」ではないように変えているとする。これらをまとめると、『伊勢物語』には「業平」の歌が多く、「業平」の話であることはわかるものの、物語は、あくまでも「業平」の話ではないように装っている」ということになる。一方、選択肢は「業平の歌を、それが誰の作であるのかまったくわからないように周到に詠み変えており」としており、〈歌〉そのものを変更した」としてある。これは、本文の内容と合致しない。よって、①は誤りであ

る。

②は、本文の「そのほかにも古人の名を……名をあらはせしはあらず」の箇所と関わる。このうち、「はぶれ」は〈身を滅ぼす・落ちぶれる〉の意の下二段動詞「はぶる」の連用形で、ここでは〈不義に〉身を落とすの意である。これを踏まえて該当箇所全体を訳すと、〈そのほかにも古人の実名をはっきり示した箇所もあるが、すっかり不義密通に身を落としたところでは、実名をはっきり示した箇所はない〉となる。すなわち、〈物語には、古人の実名を明示した箇所はあるが、不義密通に関わるところでは明示していない〉ということである。一方、選択肢は『伊勢物語』の作者は、業平をはじめ、実在の人物の名はすべて伏せており」とあり、これは、本文の内容と合致しない。よって、②は誤りである。

③は、本文の「かく意して書ける記者の……恥かがやかしまらすべきかは」の箇所と関わる。このうち、「意して」は〈注意する〉の意の動詞「こころす」の連用形に、接続助詞「て」が付いたものである。また「恥かがやかしまらすべきかは」は、〈恥をかかせる〉の意の動詞「恥かがやかす」の連用形に、謙譲の補助動詞「まらす」の終止形、当然の助動詞「べし」の連体形、反語の係助詞「かは」が付いたものである。これらを踏まえて該当箇所全体を訳すと、〈このように注意して書いた作者の心になってみるときは、天皇の御妻の不義密通をはっきりと示し、その兄弟たちの御名前をさえ挙げて、恥をかかせ申し上げるはずがあるまい〉となる。これは選択肢の内容とほぼ合致する。よって、③が正解である。なお「恥かがやかす」は、平安時代の自動詞「恥かかやく（へ恥ずかしがる）」から作られた他動詞である。

④は、本文の「又、後の直に……いかで后をいたはりまらせぬにや」の箇所と関わる。このうち、「いかで」は疑問・反語の副詞で、〈どうして〉の意を表し、末尾の「にや」は断定の助動詞「なり」の連用形

「に」に、疑問・反語の係助詞「や」が付いたもので、本来はこの後に続く「あらむ」などが省略された形である。これらを踏まえて該当箇所全体を訳すと、〈また、后が（入内する前の）普通の方でいらつしやつた折というのを、業平に気をつかって書いたなどというのだろうか。業平に気をつかって、どうして后に気をつかい申し上げないことがあるうか、いやあるまい〉となる。これは「業平」に気をつかって、「后」に気をつかわないのはおかしい」という理解である。一方、選択肢は「業平への気づかいにならないどころか」とあり、「業平」に対しても気をつかったことにならない」としている。しかし本文では「業平」への気づかいにならない」とは述べていない。よって、④は誤りである。

⑤は、本文の「この文、たとひ村上の康保の頃に……いかなるをこの者の書きあらはさんや」の箇所と関わる。このうち、「さださだと」は「はつきりと・確かに」の意の副詞である。また、末尾の「をこの者」は、〈愚かだ〉の意の形容動詞「をこなり」の語幹に、格助詞の「の」、名詞の「者」が付いた言葉で、〈愚か者〉の意を表す。形容動詞の語幹をこのように用いるのを「語幹用法」といい、意味を強めたり、感動の意を添えたりする場合の用法である。これらを踏まえて該当箇所全体を訳すと、〈この物語が、たとえ村上天皇の康保の頃に書かれたとしても、まだ清和天皇の御代に近く、二条の后も（その時期に）近い延喜十年までご健在であり、かつ、その后がお産み申し上げなされた陽成天皇も、天曆三年までご存命であったのに、（不義密通を）はつきりと示して書く人などいるまい。そのうえ、藤原家の権威がますます盛りである時期に、それに近い親族の不都合なことを、どのような愚か者が書き表すだろうか、いや書き表すまい〉となる。ここでは、二つの視点から見解が示されている。一つは〈天皇家に即した視点〉で、〈康保年間は、二条の後の夫・清和天皇の治世や、二条の后自身の存命時期、さらに二条の后が産んだ陽成天皇の存命時期に近く、二条の後の不義を書く人はいる

はずがない〉というものである。もう一つは〈藤原家に即した視点〉で、〈当時は藤原家の権勢が盛んな時期であり、藤原家出身の二条の後の不都合なことを書く愚か者はいるはずがない〉というものである。一方、選択肢は「まだ陽成天皇の権勢が盛んな時期であり」とある。これは、両視点の内容を折衷した不正確な記述である。よって、⑥は誤りである。

問5 ⑦ ④ 《内容説明問題》

①は、本文の「この歌、業平の歌と……載せられたるや」の箇所と関わる。これをそのまま訳すと、〈この歌は、業平の歌とどのような書物でもって決めて、『新古今集』に入れなされたのか、はつきりしない。もしかすると、業平の家集というものがあつてお載せになったのか〉となる。一方、選択肢を見ると、後半部に「業平の家集といったものがあつて、それに従つたと見るのが妥当である」とある。本文では「業平の家集」が存在したのではないか」という可能性を示唆してはいるが、「それに従つたと見るのが妥当である」とまでは言っていない。よって、①は誤りである。

②は、本文の「かの新古今に……載せられたるなるべし」の箇所と関わる。この箇所をそのまま訳すと、〈例の『新古今集』に、「題しらず」の歌の並びにお載せになつていたので、確かにこの物語の言葉を用いなされたのでもあるまい。ただ、おそらくは、『新古今集』には、この物語を用いて業平の歌としてお載せになつたのであろう〉となる。ここでは、〈題しらず〉となつている点は、物語の本文に依拠したとは言えないが、業平の歌として載せたのは、物語に拠つたものであろう〉と考えている。一方、選択肢は、末尾で「物語以外のものに拠つたものだろう」としており、これは本文の内容とは正反対の結論である。よって、②は誤りである。

③は、本文の「この歌、業平の口風くちぶたに似ず。……作者のよめるうた、

あまた有り」の箇所と関わる。このうち、「口風」は〈歌の詠みぶり・歌風〉の意である。これを踏まえて該当箇所を訳すと、〈この歌は、業平の歌風に似ていない。物語の作者の歌であつて、業平の歌とは見えない。だいたいこの物語の歌は、古歌を引き直したり、あるいは（地の文の）言葉に合わせて作者が詠んだりした歌がたくさんある〉となる。ここでは、「白玉か」の歌が、業平の歌風らしくなく、また、物語には作者が古歌を引用したり、新たに作つたりした歌がたくさんあり、「白玉か」の歌も作者の歌だ」とする。一方、選択肢では「物語の歌はすべて、物語の作者が古歌を引用したり、自ら作つたりしたものだと考え」としているが、これは本文と異なる。本文では〈作者の引用したり作つたりした歌が「あまた（＝たくさん）ある」とは言っているが、「物語の歌」の「すべて」がそうだ〉とは言っていない。よって、④は誤りである。

④は、本文の「然るを、後人……歌の風体を弁へざるよりなるべし」の箇所と関わる。これをそのまま訳すと〈それなのに、後人が「むかし男」を皆、業平と見るために、歌の風体を理解しないことから（生じた誤解）であるだろう〉となる。これは、選択肢の内容とほぼ合致する。よって、④が正解である。

⑤は、本文の「物語の作者の口風……業平にあらざるをもしるべし」の箇所と関わる。これをそのまま訳すと〈物語の作者の歌風のあることを理解するならば、自然と業平ではないこともわかるだろう〉となる。ここでは〈物語の作者と業平は歌風が異なる〉としている。一方、選択肢は「物語の作者が業平の歌風に似せて作つたものだ」とあり、〈両者の歌風が、結果的に似たものである〉と理解している。これは本文の内容と合致しない。よって、⑤は誤りである。

問6 8・9②・⑥（順不同）

《内容説明問題》

①②は、本文の「一興とせし例なし」となれば、あらはにすべからぬゆゑなり」の箇所と関わる。このうち、「例なし」は〈根拠のないこと〉の意である。これを踏まえて該当箇所を訳すと、〈一興として描いた事実無根のことであるので、実名をはつきりと示すことができないためである〉となる。ここで【文章Ⅱ】の筆者は、二条の後の密通事件が、〈物語作者の描いた、事実無根の話題だ〉と考えている。よって、それを「事実である」とする①は誤りである。一方、②は後半で、「それ（＝密通事件）が『伊勢物語』に描かれるはずはないと考えている」とあるが、これは、本文の「右二条后てふより下の詞は、後人の裏書なること已にもいへり（＝右の「二条后」というところから後の言葉は、後人の注記であることは前にも言つてある）」という主張と矛盾しない。よって、②は正解である。

③④は、本文の「新古今集にこの白玉かてふ歌を……いかで哀傷に入られんや」の箇所と関わる。これをそのまま訳すと〈『新古今集』にこの「白玉か」という歌を哀傷の部に入れている。この撰集の時も、後半の言葉のない本に抛られたか、後半はあつたけれども注記であるのでお採りにならなかつたか。これを本文とするならば、どうして哀傷部にお入れになるようなことがあるか〉となる。ここでは「白玉か」の歌が『新古今集』の「哀傷部」に採られた理由について、〈これは二条の後の「以下の後半のない『伊勢物語』に抛つた」か、〈後半部はあつたが、注記と考えて、その記述内容を採用しなかつた〉か、という二つの可能性を考えている。前者の場合は〈そもそも「二条の後」に関わる歌だと判断する材料がなかつた〉ことになり、後者の場合は〈意図的に「二条の後」に関わる歌と見なかつた〉ということになる。これを踏まえて選択肢を見ると、③は「あえて『題しらず』として」とあり、後者の場合とは合致するが、前者の場合とは合致しない。よって、③は誤り

である。一方④は、「それ（＝二条の后が鬼に食われたはずはないこと）に気づかなかった」とするが、これは、前者・後者のどちらとも異なる。よって、④も誤りである。

⑤は、まず【文章Ⅱ】の「ありしかど裏書なればとられざりしか」と関わる。③④の解説で見たように、ここは〈これは二条の后の〉以下の後半が物語本文にはあったが、注記であるので、その記述内容を採用しなかつた」という意であった。したがって、選択肢の「注記であることに気づいていた」の部分と合致する。一方、【文章Ⅲ】には〈物語の後半部が「裏書」である〉といった話題の記述がなく、「注記であることに気づいていた」とは言えない。よって、⑤は誤りである。

⑥は、【文章Ⅱ】の「新古今集にこの白玉かてふ歌を……いかで哀傷に入れられんや」と、【文章Ⅲ】の「実に鬼もくはざれども……なきものにして入れたるものなるべし」と関わる。前者は、③④の解説で見たように〈これは二条の后の〉以下の本文がなかつたか、あつても採用しなかつたか」ということで、どちらの場合でも〈これは二条の后の〉以下の内容には基づかないで歌を採つた」と言える。一方、後者は〈本当に鬼が食つて、亡き者となつたこととして入れたものである〉という意味で、この場合も、「これは二条の后の」以下の内容には基づいてはいない。よって、⑥は正解である。

⑦は、まず【文章Ⅲ】の「これ、哀傷に入るべきことあらねども」の箇所と関わる。これは〈この歌は、哀傷部に入れるべきものではないが〉という意で、選択肢にあるように「『白玉か』の歌を哀傷の部に載せたのは、不適切である」という判断である。一方【文章Ⅱ】では、「『白玉か』の歌が「哀傷の部」に採られた理由を推測してはいるが、採られたこと自体について、その適否を述べた箇所はない。よって、⑦は誤りである。

全 訳

【文章Ⅰ】

昔、男がいた。女で、妻とすることができそうになかつた者に、何年にもわたつて求婚し続けてきたが（結婚がかなわず）、やつこのことで密かに連れ出して、たいそう暗い時に逃げてきた。芥河という川のほとりを引き連れて行つたところ、草の上に置かれていた露を、（女が）「あれは何ですか」と男に尋ねた。（男は）目的地までの道のりが長く、夜も更けてしまつたので、鬼のいる所とも知らないで、雷までたいそうひどく鳴り、雨もひどく降つていたので、荒れ果てた倉に、女を奥に押し入れて、男は、弓や胡縁やぐらを背負つて戸口にいて、早く夜も明けてほしいと思ひながら座つていたところ、鬼がすでに（女を）一口で食つてしまつた。（女は）「ああ」と言つたけれども、雷が鳴る騒がしさに紛れて、（男は）聞くことができなかつた。しだいに夜も明けてゆくうちに、（倉の中を）見ると連れて来た女もいない。（男は）地団駄じだんだを踏んで泣くけれどもどうしようもない。

白玉か何ぞと……〈白玉ですか、（それとも）何ですか」とあの人が尋ねたときに、「露です」と答えて、その露のように、消えてしまえばよかつたのになあ〉

これは、二条の后が、いとこの女御の御許に、お仕えするようになかたちでいらつしやつたのを、御容貌がたいそう美しくいらつしやつたので、（男が）密かに連れて背負つて出てきたところを、御兄弟である、堀河大臣と御長男国經大納言が、まだ官位が低くて、宮中に参上なさる時に、ひどく泣く人がいるのを聞きつけて、引き留めて取り返しなかつた。それをこのように鬼とは言うのであつた。まだたいそう若くて、后が天皇の夫人でいらつしやつた時の話だとか。

【文章Ⅱ】

右の二条后というところから後の言葉は、後人の注記であることは前にも言っている。どうしてかと言えは、およそ、この物語には、業平朝臣の歌を多く挙げて、その人のことを作っていると理解されるが、時代や官位をもその人ではなく書き換えて、業平ではない様子に書き改め、そのほかにも古人の実名をはっきり示した箇所もあるが、すっかり不義密通に身を落としたところでは、実名をはっきりと示した箇所はない。一興として描いた事実無根のことであるので、実名をはっきりと示すことができないためである。このように注意して書いた作者の心になってみるときは、天皇の御妻の不義密通をはっきりと示し、その兄弟たちの御名前をさえ挙げて、恥をかかせ申し上げるはずがあるまい。これは、本物語の主意に相違しているので、同じ人の筆でないことが明らかである。また、后が（入内する前の）普通の方でいらつした折というのを、業平に気をつかって書いたなどというのだろうか。業平に気をつかって、どうして后に気をつかい申し上げないことがあるか。この物語が、たとえ村上天皇の康保の頃に書かれたとしても、まだ清和天皇の御代に近く、二条の後も（その時期に）近い延喜十年までご健在であり、かつ、その後がお産み申し上げなされた陽成天皇も、天曆三年までご存命であったのに、（不義密通を）はつきりと示して書く人などいるまい。そのうえ、藤原家の権威がますます盛りである時期に、それに近い親族の不都合なことを、どのような愚か者が書き表すだろうか。皆、その大本を知らないで言う説どもは、言うにも足りないものである。……（中略）……また、『新古今集』にこの「白玉か」という歌を哀傷の部に入れている。この撰集の時も、後半の言葉のない本に抛られたか、後半はあったけれども注記であるのでお採りにならなかったか。これを本文とするならば、どうして哀傷部にお入れになるようなことがあるか。

【文章Ⅲ】

白玉の歌のこと

童子問 「白玉ですか何ですかとあの人が」という歌を、『新古今集』に「在原業平朝臣」と姓名をはつきりと示し、お載せになった以上は、作り物語とも言いがたいのではないか。

答 この歌は、どのような書物でもって業平の歌と決めて、『新古今集』に入れなされたのか、はつきりしない。もしかすると、業平の家集というものがあってお載せになったのか。例の『新古今集』に、「題しらず」の歌の並びにお載せになっているので、確かにこの物語の言葉を用いなされたものもあるまい。ただ、おそらくは、『新古今集』には、この物語を用いて業平の歌としてお載せになったのである。卓見では、この歌は、業平の歌風に似ていない。物語の作者の歌であって、業平の歌とは見えない。だいたいこの物語の歌は、古歌を引き直したり、あるいは（地の文の）言葉に合わせて作者が詠んだりした歌が、たくさんある。それなのに、後人が、「むかし男」を皆、業平と見るために、歌の風体を理解しないことから（生じた誤解）であるだろう。物語の作者の歌風のあることを理解するならば、自然と業平ではないこともわかるだろう。

童子問 この「しら玉」の歌を、『新古今集』では哀傷部に入れなされている意味は、どのようなことか。

答 この歌は、哀傷部に入れるべきものではないが、これは『伊勢物語 闕疑抄』にいつているように、本当は鬼も食わないが、哀傷部に見るのは、本当に鬼が食って、亡き者となったこととして入れたものである。これらのことで、『新古今集』に、この歌を業平の歌と決めてお入れになったかと思われた。そうでなければ、この歌は、哀傷の部に入れられるはずがない。